

《書評》

『夢を追いかけて：音楽を学んだ明治女性・岩原愛の生涯』

丸山彩*著、文芸社、2023年

奥 中 康 人†

私の研究室の本棚には、『同声会員名簿』¹という名簿がある。同声会とは、東京芸術大学音楽学部とその前身の東京音楽学校の同窓会の名称で、明治22年に創設。名簿のページをめくると、卒業生たちの名前が年次順に並んでいて、その「明治24年7月10日」の欄に、確かに本書『夢を追いかけて』の主人公「松本アイ」、つまり岩原愛の名前がある。

岩原愛は1872（明治5）年石川県士族の家に生れ、東京音楽学校を卒業後、京都府高等女学校の音楽教員となった人で、1895（明治28）年に松本源太郎と結婚したことから、ここでは「松本アイ」と記載されている。同年の卒業生は11名。1957（昭和32）年に作成された名簿なので、岩原を含む9名には物故者の印が付されている（「宮川ワカ」と「高木シン」だけが存命のようだ）。

東京音楽学校、あるいはその前身にあたる音楽取調掛については、明治日本における西洋音楽受容の中心地であったことから、これまでにさまざまな研究が蓄積されてきた。だが、注目の対象となるのはきまって東京音楽学校の初代校長である伊澤修二や、アメリカから招かれたL・W・メーソンといったビッグネームか、瀧廉太郎や山田耕筰のような後世に名曲をのこした有名作曲家に偏りがちである。もちろん、神津専三郎、上原六四郎、鳥居忱、上真行、本書でも触れられている瓜生繁、幸田延、安藤幸のような、それなりに著名な関係者についての研究も少なくはない。しかし、それ以外の大多数の人々は、名簿に名前が残っていても無名の存在にすぎない。

そうした状況を踏まえると、音楽家・岩原愛の生涯をとりあげた本書は、まずは「岩原愛をとりあげた」ということだけで、それはもうたいへんな快挙なのである。

実は評者も明治時代の音楽を研究しているものの、「岩原愛」という名前を、資料のどこかでみたような記憶はあったものの、はっきりと意識したことはなかった。岩原愛と同じ明治24（1891）年卒の「依田弁之助」なら、唱歌「信濃の国」の最初の作曲者としてかろうじて知ってはいたが（有名な「信濃の国」は明治26年卒業の北村季晴が作曲）、Wikipediaに彼の項目はない。上述の「宮川ワカ」や「高木シン」にいたっては、まったく知らないし、知られてもいない。いや、音楽取調掛や東京音楽学校の出身者の大部分について、わたしたちは——音楽研究者ですら——ほとんど関

* 日本学術振興会特別研究員 RPD、立命館大学文学部授業担当講師

† 静岡文化芸術大学教授
y-oku@suac.ac.jp

¹ 東京芸術大学音楽学部同声会『昭和32年 同声会員名簿』（1957）

心を向けることなく、見過ごしてきたのである。

ただし、それには理由がある。調査・研究の正攻法として「資料や先行研究が存在すること」は鉄則であり、それゆえ「資料・先行研究がない宮川ワカや高木シンには手を出さない」というのが、わたしたちの常識的で賢明な判断とされているからである。それゆえ、論文等でそうした無名の人々について言及する機会は極めて少なくなり、それに反比例するように資料や先行研究が豊富なビッグネームについての研究はどんどん増えていく。そうすると、研究は伊澤修二やメーソン等にさらに集中することになり、無名の人々はさらに忘れられていくという悪循環に陥ってしまう。

常識という名の悪循環を断ち切った本書の成功の要因は、もちろん第一には著者の綿密な資料調査にあるのだが、それだけでなく、岩原愛の遺族と巡りあい、かれらから貴重な資料やエピソード等の提供を受けることができたこと、また遺族が岩原愛についての本（松本秀彦『母を語る』）を書き残していたという幸運に恵まれ、そしてそれらを著者がまとめたことにある。その結果として、著者は、岩原愛の立場からみた当時の音楽界の一端を描くことに成功している。

たとえば、音楽取調掛・東京音楽学校のリーダーであった伊澤修二を主役として物語を描くときには、アメリカに留学から帰国したエリート文部官僚の伊澤が、招聘したメーソンと共に、いかに苦心して音楽教育を創始したのか、といった視点で描くことになる。組織のトップの立場から見る音楽業界の風景は、とても見通しが良い。音楽史上の重要な事件が、常にビッグネームの業績として結びつけられ——伊澤修二が『小学唱歌集』を編纂した、のように——、とてもわかりやすい。しかし、その組織に属する人々から見える景色は、必ずしもビッグネームの輝かしい業績から見える訳ではない。

その良い一例は、東京音楽学校の予科の1年間を終えて試験をパスした岩原愛が、本科に入学を許されるときのことである。本科の「専修部に進学するか、師範部に進学するか」は、「音楽家になる素質」があるか、「音楽の先生に向いている」とかという選別基準によって「学校側が決定」することになっている、と著者は言う。これまで評者はあまり深く考えることなく、自分の希望で「専修部」か「師範部」かを選べるものだと思っていて疑うことがなかったので、大変驚いた。単に私の無知によるものと言えればそれまでだが、どのポジションにいる人物の目を借りて歴史を叙述するのかによって見え方が変わってくる、ということに尽きるのだろう。

サブタイトルにある「音楽を学んだ明治女性」について考察するうえでは、この本科「専修部」「師範部」の制度を、もうすこし深く掘り下げることで新たな視角を得ることもできる。たとえば、この制度が始まった1889（明治22）年から10年間の卒業生（100名）に関して、男女別（男性56名、女性43名）²に分類してみると、

男性・専修部	28名	女性・専修部	30名
男性・師範部	28名	女性・師範部	13名

となっており、男性は専修部・師範部が同じ割合で配分されているのに対して、女性は専修部に対して師範部が半数以下しかない。専修部・師範部の選択が、本人による主体的な選択ではなく、学校による選別というのであれば、この明白な配分の違いは、単に学校側の「音楽家になる素質」「音

² 『同声会員名簿』2～5頁。名前から性別が判断できない1名を除く。

楽の先生に向いている」という選別基準の結果だけではなく、それとは別のフィルターによっても選別されていた可能性があったことを示唆しているようにも見える。明治女性は男性よりも演奏や歌唱が上手だったのだろうか、明治女性は男性よりも音楽の先生に向いていなかったのだろうか³。

岩原愛は、「専修部」に配属を決められ、優秀な成績で卒業した。しかし、1892（明治25）年、明らかに、ディットリヒからの求婚に起因する何か大きな力に押されるように「音楽の先生」として京都府高等女学校に赴任することになった。これは榮転か、放逐か、いや一概にはどちらとも言えないところであり、そのどちらでもあるように見えるが、その際に、彼女の意志が入り込む余地があったのか、なかったのか、素直に従ったのか、抗うことはなかったのか、彼女の「夢」は何だったのか（そもそも「夢」を持っていたのか）等、いろいろ思いを巡らせたくなる⁴。幼い頃から「将来の夢」を持つ——持たされる——ことが大前提となっている現代とは異なっているだろうから、過去に対して現代の価値観を投影することは避けたい。

文章はおしなべて読みやすい。プロローグで著者は、本書は「研究書としての体裁」を取らないと宣言し、「歴史や音楽の研究に携わっていない方々にも、広く読んでいただきたい」と希望が述べられている。だが、これについては読了後もいろいろ考えさせられた。

「広く読んでいただきたい」は、あらゆる著者が願うところであり、できるだけ平易な表現を用いながら、なんとか複雑な事象を説明しようと努めることになる。しかしながら、本書では、ある部分では典拠として一般の人々の手には入りにくい（モノによっては Web で簡単に手に入る時代にはなったが）雑誌論文、紀要論文の類の書誌事項がこと細かに記されている。もちろん、参考文献の書誌事項を記載することは学術論文では必須であり、研究者にとって参考になるところでありがたいが、想定する読者層に対しては、著者の意に反してハードルを上げてしまっているだろう（学生に向けての参考文献の書き方のお手本にはなる）。逆に、研究者の側から見ると「そう断定している根拠は何なのか」と、とても興味・関心を掻き立てられる部分について、しかしとくにそれ以上は言及しない部分がいくつかあり、しかしながらこれは「一般向けの読み物だから」と、ぐっと我慢をしなければならないので、もどかしい。これは本書に限ったことではなく、研究論文が商品として流通するときにどうしても直面することになる課題であろう。

本書を読んでとりわけ興味を持ったのは、結婚相手の松本源太郎についてである。本書では記述が少なく、家庭内ではずいぶんと影が薄いような印象しか得られなかったのだが、明治の教育界における重要人物で、結婚をする直前にはイギリスの美術批評家ジョン・ラスキンを日本に紹介することにも貢献した、かなり魅力的な人物のようである⁵。源太郎の思想形成に愛さんは何かを与えたのだろうか。

³ 明治時代の女性と音楽についての論考に、玉川裕子『「ピアノを弾く少女」の誕生：ジェンダーと近代日本の音楽文化史』（青土社、2023）がある。

⁴ 岩原愛が1892年9月に京都府高等女学校に赴任したときには嘱託唱歌教員としてであったが、高等女学校と師範学校の音楽の教員免許を取得したのは1894年2月21日である（『師範学校・中学校・高等女学校教員免許台帳抄』[1904]による）。しかし、1895年11月に京都府高等女学校を退職して、12月に松本源太郎と結婚をする。この一連の経緯も、なんとも慌ただしく腑に落ちない。

⁵ 越前福井藩重臣の本多家の家老、松本晩翠（禁門の変や戊辰戦争で活躍）の長男。横浜でオランダ改革派の宣教師J・H・バラから英語を学び、東京帝国大学ではE・F・フェノロサの講義を受けた。その後、英国に留学をする松平康莊の監督として英国に渡り、自らもオックスフォードで学ぶ。第一高等中学校の教員時代の生徒に夏目漱石がおり、教頭として五高（熊本）に赴任したときの同僚に英語教員の漱石がいた。漱石の英国留学を松本源太郎が推薦したとも言われている。著書に『心理学』（哲学館、1888）がある。